

温湯浸漬法と生物農薬の体系処理によるばか苗病の防除

古川農業試験場

1 取り上げた理由

近年，生物農薬や温湯浸漬法は化学合成農薬を用いない種子消毒技術の一つとして普及が進んでいるが，その一方ではばか苗病の発生面積が増加している。生物農薬や温湯浸漬法は，処理後の育苗環境など種々の要因により防除効果が低下するおそれがあり，育苗時に潜在的に感染していた苗が本田移植後に発病してくる事例も見られている。そこで，温湯浸漬法の補完的防除として生物農薬を組み合わせた体系防除は，ばか苗病に対して高い防除効果が認められたので参考資料とする。

2 参考資料

- 1) 温湯浸漬法とトリコデルマ・アトロピリデ水和剤（以下商品名「エコホープDJ」）及びタラロマイセス・フラバス水和剤（以下商品名「タフブロック」）との体系処理は，それぞれの単独処理よりもばか苗病に対する防除効果が高まる（図1，2，3）。

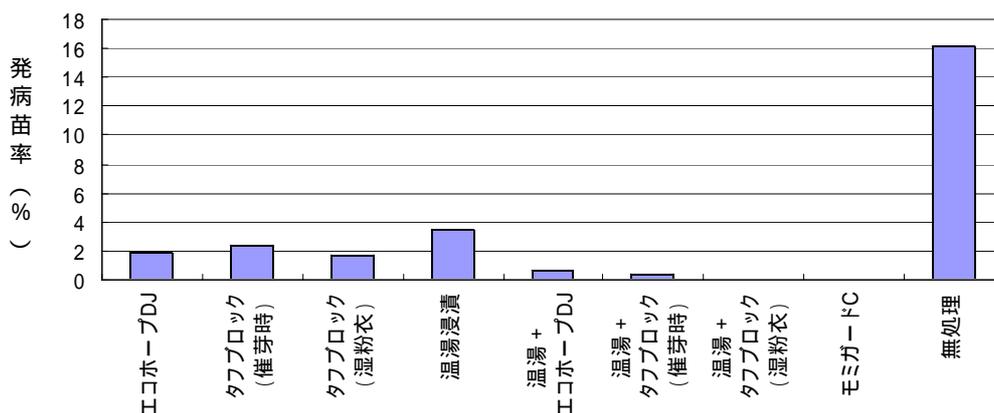


図1 生物農薬と温湯浸漬法との体系処理におけるばか苗病防除効果

注) 移植時における発病苗率を示す(調査:5月14日)

3 利活用の留意点

- 1) エコホープDJ，タフブロック及び温湯浸漬法において，ばか苗病に対する育苗期に得られた防除価と比較し，本田で評価した場合の防除価は低下する（図3）。生物農薬や温湯浸漬法はばか苗病の潜伏感染苗が多い傾向にあり，本田においても発病すると推測される。そのため，健全種子生産のためには採種ほ場の周辺ほ場では化学合成農薬による種子消毒を行う必要があるが，農薬節減栽培を行う場合は温湯浸漬法と生物農薬の体系処理も有効である。
- 2) 温湯浸漬法と生物農薬の体系処理を行う場合は，温湯浸漬処理を行った後に生物農薬を処理する。また，体系処理においても化学合成農薬と比較すると効果はやや劣るので，発病のリスクについては考慮する必要がある。
- 3) ここでの温湯浸漬法は60 10分間の浸漬処理を行っている。また，発病苗率は健全種子にばか苗病罹病種子を5%混入した種子を用いた育苗試験における発病苗率であり，発病株率は枯死株を含めた発病株の累積値を示す。

（問い合わせ先：古川農業試験場作物保護部 電話0 2 2 9 - 2 6 - 5 1 0 8）

4 背景となった主要な試験研究

1) 研究課題名及び研究期間

新農薬による病害虫防除試験 (平成19年度)

2) 参考データ

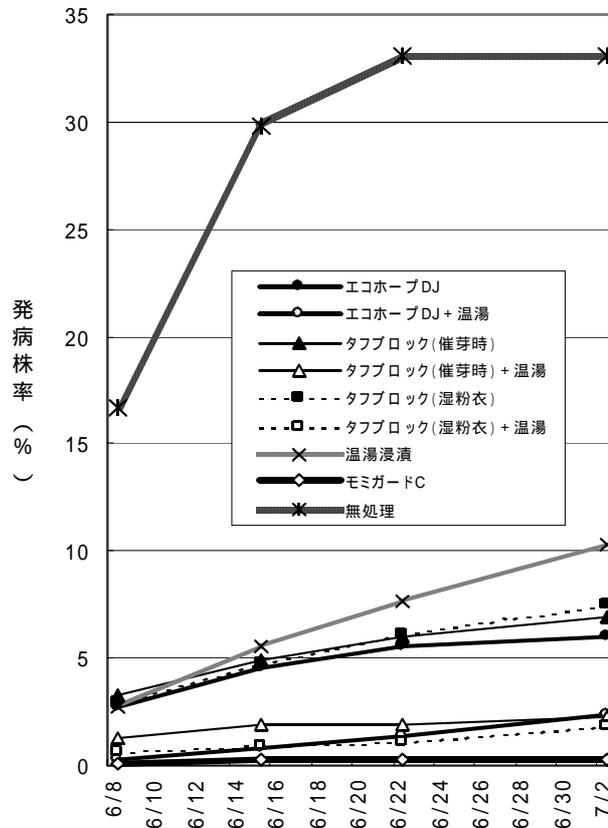


図2 本田における発病株率(累積値)の推移

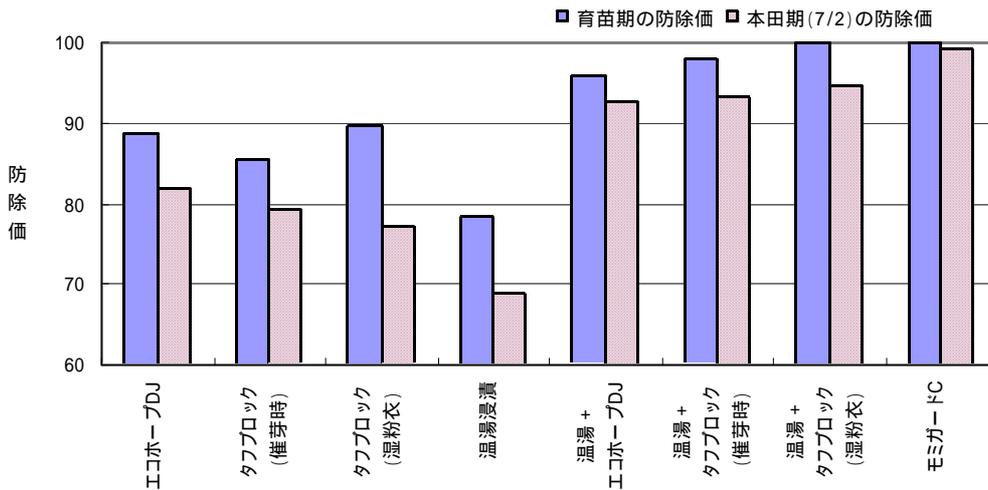


図3 育苗期と本田期における防除効果の比較

3) 発表論文等

a その他

a) 第61回北日本病害虫研究会にて発表